

兵藤兄の受難

J. J. J

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園で教師をしている兵藤家の長男がエロ小僧の弟をしばいたり、悪魔達と交流したり、とにかく死なないように頑張る物語。

※不定期更新、ノリとテンションによる人物崩壊、つじつまの合わない描写に注意

目次

兵藤家の長男は面倒見がよい | 1

兵藤家の長男は甘党(重度) | 16

兵藤家の長男は面倒見がよい

兵藤千歳が教職として勤める駒王学園、その高等部には名物といえるものが二つある。

一方は三年生の女子生徒グレモリーと姫島朱乃の二人を示す『二大お姉様』。どちらも人並み外れた——というか人間離れた美少女二人組だ。

一個人としてみれば実に目の保養になり、一教師としてはどちらも少々交遊関係の幅が狭い点が気にかかるものの、成績は極めて優秀であり凡そ『優等生』という評価に落ち着くのが普通だろう。

もう片方は二年生の松田、元浜、そして千歳の弟である兵藤一誠の三人からなる『変態三人組』。

公共でのエロトークは思春期特有の話題としてスルーしてやれるが、クラスメイトが見ている中で『紳士的円盤』あだるとうな映像記録をやり取りし、果てには女子更衣室の覗きまでやらかすため学園きつての問題児というイメージが周知されている。

そして今、使われていない教室の一つで千歳の目の前には松田と元浜、一誠が正座していた。

「さて、三馬鹿トリオ。申し開きはあるか？」

「「……………」」

正座して顔を恐怖で引き攣らせる松田・元浜・一誠の目の前で横向きにした椅子に座り、にこやかな笑顔を浮かべる千歳。実際には『ゴゴゴゴツ』という擬音が付きそうな迫力のある笑顔なのだが、それはさておき。

彼らが何をしたかという、まあ、お察しの通りである。(当事者からすれば)緊迫した状況の中、意を決した表情で兵藤が口火を切る。

「お、お慈悲を……「あ？」 No, sir! なんでもございません！」

慈悲を乞う一誠を一言で黙らせる千歳。教師とは思えない、ドスの効いた発音と表情であった。人によつては精悍とも、あるいは目つきが悪いと評される顔立ちもありチンピラか、暴力団員でも通用しそうである。

そのことを内心反省はしつつ、三人に与える罰を考える。教職に就く以前のように物理的に性根を叩き直せば良いのだが、昨今の教育現場で体罰は厳禁である。とは言え軽すぎても女子生徒や教員が納得しないので、線引きが難しいところであった。

すこし伸び気味になった髪を弄りながら、ふと手が足りないのでボランティアを募ると言っていていた相手を思い出す。

「高等部全体の花壇の朝の水やりと放課後の手入れつてところか」

「あの三人を曲がりなりににも止められるのは兵藤先生位なので……」

「せめて一人だけならともかく三人纏めて鎮圧、もとい沈静できるのは……」

「ごもつともな意見である。千歳自身あっさり納得してしまう意見ではあったが、頭が痛いことには変わりがない。」

その代わりというか、あの三人が問題を起こした時に備えて、普段の仕事は多くの同僚たちが手助けしてくれており比較的作業量は少ない。

……その分、問題を起こすと千歳に任せきりになるので全体的な仕事量で見ればイーブンか、もしくはは多いくらいなのだが。先ほどの様子を鑑みるにこれから先も苦勞するだろう（確定）。

それから報告書や次回の授業で使う資料・教材を纏めると、まだ残っている同僚に先に帰ることを告げ職員室を出る。まだ一部部活動の生徒などは残っており、三馬鹿への説教がなければもう少し早かったのだが、文句を言っても仕方がないとため息をつく。

途中、購買部で残り物で割引された菓子パンや惣菜パンを適当に買い込み、とある教室に向かう。……弟（＋その悪友二人）のあれな所業に色々と口を聞いてもらっている詫びのつもりで持っていたのが常習化してしまっていた。

今では駅前のお高いバウムクーヘン（二つ当たり2500円）をねだられる羽目になったが、自業自得である。

校内を歩いていくと目的の教室が見えてくる。他の教室と同じ引き戸には薄手のカーテンがかけられていて、中が覗けなくなっている。その上にあるプレートは『生徒会室』の四文字。

少しだけ乱雑にノックし、返事を待たずに扉を開ける。細長い四角を描くように並べられた長机とパイプ椅子。資料が並べられたスチール製の収納棚。少し型の古いノートパソコンもあり、少し生徒会室には不釣り合いの高級そうなポットやティーカップが置かれているくらいでどこにでもありそうな生徒会室である。

後ろ手に扉を閉めると、書類に目を通していた少女が顔をあげる。一瞬、咎めるように眉を寄せ直ぐに苦笑めいた表情でため息をついた。

「よう、お疲れさん」

「またいらしたんですね、千歳先生」

「悪いな。ほれ、これいつもの差し入れ。好き勝手に食う連中が戻る前に、先に欲しいものがあれば食べた方がいいぞ?」

「そう、ですね。いい時間ですし、少し休憩を入れることにします。………あの、クリームパンはありますか?」

「えーっと……お、丁度一つだけあった」

そう言う少女——駒王学園高等部生徒会会長、支取蒼那は年頃相応に微笑みを浮

かべる。普段からそう言う表情出せば一層人気が出るんだろうなあ、と内心考えつつ、支取がポットの元へ向かい紅茶を淹れ始めたので、適当に椅子を見繕って座る。

数分とせず差し出されたカップを受け取り、一口。口腔から広がる香りを楽しみつつ、短い時間だがのんびりと世間話に興じることにした。

「いつもスマンが、また弟が悪さしてな。お前らの方にも仕事が行くかもな」

「本当にいつものことですね。我々からも注意はしているんですが……」

「アイツはその程度でへこたれるような性格してねーからな、良くも悪くも」

「……その情熱というか執念というか、とにかくそういう部分を部活動にでも向ければ彼の評価もうなぎ上りでしょうに」

支取の言うことは全くをもつてその通りなのだが、赤ん坊のころから面倒を見て来た千歳が何もしてこなかったわけではない。

部活は当然として武道にボランティア、プラモづくりに果ては写経など、性欲に傾倒している情熱の方向性を変えようと苦心してきたが結果は御覧の有様である。一時期プラモデルにハマらせただけでも千歳の奮闘ぶりが分かるうというモノだ。

「もういつそのこと、どこぞの風俗にでも叩き込むかな。妙なところで純情なアイツのことだから、現実を知りゃあ落ち着くかもな」

「どこに性風俗を生徒に推奨する教師がいるんですか。……というか純情……」

純情？」

『どの辺が？』と言わんばかりのお言葉、ありがとう。恋愛に関して夢見がち、つてのが正しいかね？」

その辺りの観念は主に両親の影響だろう。物心ついた頃の千歳の目の前でも喧嘩というには迫力のないものしかしてこなかった、夫婦円満を体現してきた両親である。千歳もそういう関係には憧れているし、経験のない一誠が無意識で理想とするのに訳もないというべきか。

それ以上に性欲（というかスケベ根性）が強すぎるのが問題だが、それはさておき。

「後、花壇の水やりと整備はあの三人組に押し付けといたぞ。見張りに俺も付くことになるだろうが、いつ、どこから始めるかは生徒会（前）に一任するわ。精々こき使ってくれ」「了解しました。男子生徒が4名もいれば、あとは生徒会のメンバーがいれば回せると思います」

「なんだ、もう動いてたのか？」

「役員が個人個人で声をかけているだけでしたが。それでも一人集まったのは重畳、と言えるのでしょうかね」

既に生徒会の方で手を回して人員を確保しようとしていたらしい。『ボランティアなんてやってどうするんだ』と学生の内は思うものだが、これで意外と他にはない、ある

いは他とは違う経験は進学には強みになる。

その生徒はちやんと自分の進路を考えているんだな、と感心する千歳。当然この段階では知る由もないが、その男子生徒Sは実に俗的かつ思春期の男の子らしい理由で動いていたりする。

「いつそのことそいつも生徒会に組み込まえよ。こういう体力のいる仕事は男の手に戻ってしまった方がいいぞ」

「場合によつてはそれも考えます。……ついでに千歳先生も正式に顧問になりませんか？」

軽い勧誘の言葉。しかし、そこには冗談交じりに言葉を交わしていた雰囲気から一変してひどく真面目——というよりは狙いを定める狩人のような、そんな真剣な響きを含んでいた。

「そういうのはノーセンキュー。うちの弟から目を離すと、ほら、な？」

「……………そうですね」

それに気づいていながらもあくまで千歳は軽い調子で勧誘を断り、理屈もへつたくれもないその言葉に長考の末、リターン千歳を得るよりリ一誠の所業スクの回避を選択する支取。そして二人まるつきり同時にため息を吐く姿が実に哀愁を誘う。

「……………良い時間帯だし、そろそろ帰るわ。あんまり遅くにならないようにな」

「先生もお気をつけて。差し入れ、いつもありがとうございます」
「おう。また明日な」

そう言つて退室する。窓から見える朱に染まった景色がなんとなく不気味に感じるのは、暗がりが増える時間帯だからか。

あるいは雑木林の向こうに垣間見える古めかしい木造の旧校舎がそういう雰囲気醸し出しているのか。

言葉にしがたい不安を感じながら千歳は帰宅する学生たちに混じつて帰路についた。

—————

大学入学以来、千歳は安価なアパートで一人暮らしをしている。

実家はこの町にあるものの、『大の男が一人暮らしを経験したことがないのはどうなんだ?』と両親に相談したら月に一回は実家に顔を出すことを条件に許可が降りた。

以降、外せない用事がない限り生真面目にも毎月実家に帰っている。

学校からアパートに戻ると直ぐに着替え、ウォーミングアップを兼ねた走り込みと鍛錬に出掛けた。錘代わりに背負うバッグには薄めたスポーツドリンクと幼少期に貰ったとある体術の指南書……とは名ばかりの大学ノート。

このノートがくせ者だった。

何か別の書物の記述の一部を写したもので、そのもそも日本語ではなくラテン語で記されており、所々に日本語の注釈と図解はあれど注釈は主観的かつ端的で要領を得ず、図解は下手くそな手書きという手作り感満載の代物。

幼くも千歳が四苦八苦しながら翻訳してみても隠喩や暗喩が多く使われており、一時期は完全にお手上げ状態。

意地でも解読してやろうと勢いで大学で語学を専攻し、いつしかラテン語・英語が話せるマルチリンガルとなつてようやく「アレ？俺、何しに大学入つたんだっけ？」と冷静になつた程の難解さである。

まあ、その甲斐あつて解読は大きく進み、学業も優秀だったのだから人生とはどう転ぶかわからないものだ。……次会つたら文句言おう、と千歳に決めさせたのはノートを渡した者の自業自得だろう。多分。

「……………」

鍛錬から帰るとアパートの自室の前に何かがあった。暗い夜闇の中、少し古くなつた蛍

光灯が照らす下には黒い物体。

それが何かわかる前にその黒いものは千歳に向かって走り寄り、顔目掛けて跳躍。そして一閃。

「フシヤアツ！」

「いつてえっ!? いだ、ちよ、こら、イダダダ！ くおらあ、ドラ猫!! 何いきなり襲ってきてんだ、発情期か！ いったい!?!」

「フカーーッ!!」

千歳の顔に三本の引っ掻き傷をつけた黒猫はそのまま肩や腕を足場に噛みつき、引っ掻き、猫パンチ連打を入れながら跳び回る。

思わぬ奇襲に千歳もたまらず悲鳴をあげる。なんとか取っ捕まえようと手を伸ばすが、牛若丸がごとき跳躍を見せる黒猫を捕まえ切れず手は空を切るばかり。

むしろ発情期の辺りでラッシュが加速。爪の一撃をかわしたと見せかけアパートの壁や手すりを使って飛びかかり、空中で捻りを加えて尻尾を鞭のように叩きつける。

どこぞの怒り状態の迅竜もかくやとばかりの三次元機動に千歳も回避と防御で手一杯である。

5分が経過した辺りで怒りが止んだらしい黒猫は地面に降り立ち、千歳の暮らす部屋のドアをガリガリと引っかき出す。はよ開けると言いたいらしい。

しかし、当の千歳はジャージと共にボロボロにされて地面に横たわっていた。鍛練帰りで疲れていたのかもしれないが、猫に一方的にやられるとはひどい下剋上を見た。

「ニヤ〜」

「……あー、わかつたわかつた。つたく、謝るくらいなら襲つてくんнатての」

横たわつて動かない千歳に近寄り、ペシペシと頭を叩いて催促してから謝るように初めに刻んだ頬の血の滲んだ引つかき傷を舐める黒猫。そこに確かな謝罪を感じたのか、千歳は疲れ痛む身体を起こし猫を抱き上げながら立ち上がる。

玄関の鍵を開け中に入ると、黒猫は飛び降りてお気に入りのクツションの上へと落ちて着いた。

この黒猫との関係は千歳が一人暮らしを始めた頃、アパートの前でボロボロの状態で転がっていた黒猫を拾ったのがきっかけだ。

怪我はしていないようだったが弱々しい姿を見て千歳はすぐに部屋に連れて行き、温かいお湯とタオルで身体を温め、お湯で薄めた微温いミルクを与えた。最初、目を覚ましたときには警戒していた黒猫だったが、弱った身体には逆らえず受け、一週間もする頃にはある程度心を許していた。

そこから更に一週間程で完全に復調。千歳が大学に行っている間に窓から逃げ出したが、時折こうして寝床と飯をねだりにやって来る半同居猫である。

「さて、夕飯は……確か鮭の刺身があつたような」

シャワーから戻り、冷蔵庫の中身を物色して今晚の夕飯を考える。ややあつてチルドの中からおかずとなる刺身の入ったパックと、野菜室から白菜や人参などの野菜に油揚げを取り出す。

まな板の上で野菜を大きめに切り出すと軽く油を引いた鍋に投入。そのまま軽く痛めて焼き色をつけると、今度は油揚げと水を入れて火にかける。

その間にラップを複数枚敷き、炊飯器から茶碗によそつたご飯をその上に乗せて広げていく。粗熱が取れたらラップで包んで冷凍しておくことで炊飯器を使う手間を少なくしていく。

煮立ちはじめた鍋の中の人参に串を刺し、柔らかくなつたのを確認して味噌を投入。

沸騰しないように気をつけながら刺身を切り分け、その内二、三切れをポットから注いだボウルの中でさつと湯引きして油を落とす。こちらは猫用のようで、殺菌と更に半分に分けられることで食べやすくしてある。

折りたためる座卓を取り出し適当に刺身と味噌汁、ご飯を盛り付けて運ぶ。その近くにはいつの間にか先ほどまではぐでえとだらけていた姿とは打って変わってお行儀良く座って待っている猫がおり、以前と変わらないそれに千歳が呆れつつ小皿によそつたご飯と刺身、水を置いていく。

座布団代わりのクッションを敷いて座りこみ、いただきますと小さく唱えて醤油指しを手を取ったところで肘に肉球の感触。そちらを向くと案の定、黒猫が何か訴えるように金色の瞳をこちらに向けていた。

「……自分の鮭にも醤油かけろ、と？」

「ニャー！」

「いや、ダメだろ。前もかけといてなんだが、塩分取りすぎだぞ」

「ニャー!!」

「あーはいはい、わかった。ただし体調悪くなっても面倒見ねーぞ」

そう言いつつ、既に近場の動物病院の電話番号と住所のメモをとっている辺り面倒見る気満々である。

猫の鮭に向けてポタポタと数滴醤油を垂らすも一向に食べないため、観念してさっと回すようにかけると満足したように鼻を鳴らして食べ始める。

それを見てから千歳も食べ始め、一時間もする頃には食べ終わった食器がシンクに張られた水につけられる。それまでに刺身を奪い取られたり、猫にシャワーを浴びせたところで水を飛ばされて洗濯するものが増えたりしたが余談であろう。

黒猫を膝の上に乗せて手持ち無沙汰に時折肉球に触れ、頭から背中にかけて撫でる。ピロードのような手触りを楽しみつつ、ふと思ひ立ち万歳させるように抱き上げて何と

なく疑問になつていたことを口にする。

「お前も変な猫だよなあ」

「ニヤア？」

「飯食う時人間みたいにおかずをおかずとして食べるし、野良の割に毛並み自体はやたら艶があるし、合いの手入れるみたいに鳴くし」

「……ニヤ、ニヤ〜ン」

「もしかして化け猫なんかだったりすんのかね、お前」

「ニヤツ!？」

「……ないか。夢見んのも大概にすべきだよなあ」

「……ニヤウウウ〜ツ」

何が気に障つたのか、若干機嫌を損ねた様子の子の黒猫を離してやるとまたも猫パンチを喰らう。しかし、先ほどと異なり威力も勢いも足りないもので、顔に当たってもペチペチと音を立てるだけなので、千歳はそのまま猫パンチ（の肉球の感触）を受け入れていた。

兵藤家の長男は甘党（重度

（また、この夢か）

うまく思考の定まらない夢心地のままに千歳はごちる。

最近——それこそここ、一年くらいの間に時折見るようになった、一人のひどく美しい女の夢。

結び上げた黒髪に黒を基調とした艶やかな着物。

花魁のように着崩されたそれを身に纏う肢体は、全体的な印象は猫のようなしなやかさだというのに男女の別無く見惚れるであろう抜群のプロポーション。暗闇の中、うつすら見える顔立ちはずつとするほどに美しい。

そんな女がいたはずらつぽく、いつそ妖しげに微笑みながら己にしな垂れかかる様はひどく浮き世離れしており、世の男性が今の彼女の艶姿を見れば見ただけで魂の緒を抜き取られるのではないだろうか。

しかし千歳はそれに頓着していない——否、それ以上に関心が向いていたのは彼女の瞳だった。

着物や髪、夜闇の『黒』の中でも色褪せない金色の瞳。

目を細めれば三日月に、満面の笑みを浮かべれば満月のように輝くであろう綺麗な瞳はどこことなく——暗い感情に曇っていた。

怒りや憎しみではなく、悲しそうな、後ろめたそうな。そんな憂いを帯びた色合いの感情を垣間見る。

何故そんな目をするのか、その理由など千歳には知る由もない。知りたいと思つていく訳でも、多分ない。

ただ、曇り一つない綺麗な満月（瞳）が見たいと、そう思う。

（弟分含む）愚弟三人衆への処罰が決定された週末。

本来なら2〜3日ほど滞在し、ここぞとばかりに食料を食い溜めしてから出ていく黒猫はなぜかまだ千歳の部屋にいた。今は胡坐をかいた千歳、その膝の上に朝エサ後の至福とばかりに丸くなって眠っている。

そんな黒猫を気にも留めずに千歳がしかめっ面で携帯の画面に映った画像を凝視する。

つい先日、弟の一誠からメールと共に送られてきたものなのだが、件名が『a K E v A G b p e n g !』と謎の物だったので学校で問い詰めてみると

『え、聞きたい？ なあなあ、そんなに聞きたい？ いやー、しようがないなー！ そこまで言われたらなー！ なんと、俺に！ 彼女が!! 出来ましたあ!!!』
『……………目覚ませえ!』ブヘエツ!!』

——戯言をほざいたため、思いつき張り飛ばした。あまりにもウザかったからというのもあるが、それは理由のほんの一部である。多分。

その後も話を聞こうとするが人生初——むしろ生涯最初で最後の——チャンスに浮かれまくっていたため、すわ美人局かと心配になり、その日の仕事を可能な限り前倒して放課後ファミレスに呼び出し話を聞いた。

学園での一撃が効いたのか、浮かれてはいるものの冷静に話をする一誠の話を聞くにどうにも相手側の一目ぼれのようなのである。

『……………普段の愚弟一誠の所業を知らないのであれば、まあ。あり得ない話では、ない、かも』とも聞いていて千歳も思った。

千歳は父親に、一誠は母親にそれぞれ顔立ちが似ている。

ただ、精悍だが険のある印象を受ける千歳と異なり、十代前半の少女なら中性的な一誠の方が女性受けはいいだろう。

スケベ根性丸出しなところを除けば性格だつて悪くないのだし、と思うのは兄としての鼻頂目か。

ともかく、夕日に照らされる学生服を着た可愛いらしい容貌の少女が映つたそれ自体は、何の変哲もない写真に過ぎない。

ではなぜ、そんなものを見続けるのか。その理由は一つの疑問を持つたからだ。

「——この辺りにこんな制服の学校あつたか？」

千歳の勤める駒王学園は下は幼等部から、上は大学部まである一貫の進学校である。ましてや元は女子校であつたこともあり、それなりに裕福な家柄の生徒も多い。

学園全体が共学化したことで多少は和らいでいるというが、それでも生徒の安全・風紀を守るため警察だけでなく地域住民と協力し合い、長期休暇の時期には地元有志による夜間巡回などが現在でも行われている。

そのため駒王町近隣で見かける制服、その特徴についてはある程度周知されているにも拘らず、携帯に映る少女の制服には心当たりがなかったのだ。

最初は忘れていただけだろうと思つていたが、どうにも気にかかりネットで調べてみた。当然、少女の着ていた制服は見つかったのだが、

「……………いや待て待て、遠過ぎだろ」

関東圏の一地方都市に過ぎない駒王町から、その学校まで登校するには車にしる電車

にしる時間が掛かった。近年開発されたりゾート地にほど近いそこは学生寮もあり、長期休暇や自宅療養しているというならまだしも、普段の登校には遠すぎるし、その学園から駒王に帰ってくる頃には既に辺りは真つ暗だ。

ヘリでも使つて飛んでくるか、或いは待ちかまえていなければ物理的にあり得ない。
（コスプレ？ 持っていた誰かから借りたか、もしくは卒業生……いや、制服着る理由にならないだろ）

（この町の駅を使う家庭で、この制服の学校に入学した娘がいるなんて聞いた事ねえぞ？ そもそも一目惚れだつーけど、態々この町からあの学校に入ることを決めた娘がうちの愚弟に何時出会うよ？）

（………仮にそうだとしても待ち構えるような女とかヤバいだろ。俺個人として有りか無しかで言うなら有りだが、それは置いといて）

（………『偶然』一誠に惚れた良い家のお嬢さんが、『偶然』自宅に長期療養しに、『偶然』電車を乗り継いで、『偶然』放課後の一誠に出会う？ それこそあり得ない………と切りたいたいの何故だ、あのバカタレなら引き寄せそうな気もするのは何故だ………）

そこから一時間ほど（いつの間にか起き出した猫が頭の上に登り携帯の画面をのぞき込んで）微動だにせず、出した結論は『愚弟がヤバい女に目をつけられた』というモノだった。

とりあえず実家の方に電話をかけてみるが、一誠は朝早くに出かけたという。電話に出た母の話ではデートだとか。次に一誠に電話をかけてみるがスルー。数分後、メールで返信が来たと思えば『俺の彼女可愛い、天使か』とツーショット写真が添付されており、思わず強くなった握力で携帯の画面に罅が入る。

どうにかこうにか連絡をつけようとするもうまくいかず——
「なんでこんなストーリーカーみたいな真似を……」

最終的に千歳は街に繰り出し、一誠を探し回ることになった。

エロガキではあるが根っこが純粹というか素直というか、意外とオーソドックスなデートになるだろうと予測を立てたのだが、今の所発見には至っていない。

ちなみにホテルの類は一切見回ってない。前述した理由もあるが、もしバレた場合羅利千歳による地獄の折檻が待っていることを察知した一誠が最初からデートプランから除外するだろう、と信頼したからだ。酷い信頼もあつたものである。

本来なら探し回ってもすれ違う可能性が増えるだけ。ある程度何処に行くかは絞れているのだから喫茶店なりファミレスなりで待ち伏せするべきだし、そうするつもりだったのだが……

「ニャー」

「なんでこんな時についてくんだよ、お前は」

「…ニヤ、ニヤ…」

「さつき焼き鳥買っただろうが、我慢しろ」

何度放り出しても羽織ったパーカーのフードの中に潜り込み、離れようとしない黒猫のおかげでどこにも入れずにいた。しかも歩いているとたこ焼きやら焼き鳥やらをねだり、進路妨害をしてくるのである。

……………なんだかんだ言いつつ、買っている千歳も千歳だが。

日も傾き出し、当てもなくぶらつきながら探すことに億劫になつて来た千歳は一息入れようと時間を確認し、丁度この時間帯なら、と公園へと足を運んだ。

公園内は夕暮れも間近というこの時間では人もまばらで、時折これまで遊んでいたのであろう子供たちや親子連れとすれ違えばかり。時々フードの中にいる黒猫に気付いたのか、後ろから「さつきの人、ネコさん連れてたー」と黄色い声が聞こえてくる。

「子供は元気だねえ」

思わず、ポツリと零した口には穏やかな笑み。しかし、すぐに引き締まる。

視線の先には目的地と定めた白い大型のキッチンカー。買ってすぐに食べられるように周囲におかれていたであろう丸い屋外テーブルとイスは重ねられて、キッチンカーのすぐそばで片付けられるのを待っている。

ショーケースの中に見えるのは、薄皮のような生地に巻かれる直前のクリームやイチ

ゴ・バナナなど色とりどりの果物類。ぱつと見たただのクレープの屋台であり、その実もただのクレープの屋台である。

ただし狭い車内で作業をしているモノを見れば、その評価は一瞬で覆ることは明白であつた。

見よ、巨木の如き彼の者の腕を。そして生木を易々と引き裂くであろうその指先を。

見よ、荒野の如く荒々しく、岩盤のようにそびえる胸板を。鉄の棍棒を受けても微動だにせぬであろう鋼の胴を。

おお、その眼は凄絶な殺意を放ち、されど無垢な瞳は深遠なる宇宙^{ソラ}の如く。頭頂に見えるは野獣の耳か、或いは魔性の角か。

汝、心せよ。前触れなく彼の者の前に立つ者は勇氣と覺悟を振り絞らねばならない。でなくば理不尽な死の悪夢にとらわれり、或いは夢と愛と希望を名乗る呪いをその身に刻まれり。

彼の者の名は――

「よう、ミルさん」

「?」によ、千歳君久しぶりによ」

——ミルたん（自称）。

四肢強靱なる覇者の肉体と魔法に憧れる乙女の心を併せ持つ、常道から外れし一般人である。……一般人とは何だろうか？

「おや、今日は可愛らしいお客さんも一緒によ。……触つてもいいかによ？」

フードから少し頭を出していた黒猫に気付いたミルたんは、千歳に断りを入れつつ猫を取つて喰おうと——もとい触らせてもらおうと手を伸ばす。

しかし、自身に近づく巨大な手のひらに恐れを抱いたのか、黒猫は「フシャー——ッツツ!!」と今まで見たこともないくらい勢いで威嚇しただけで、残念そうにしながらも手を下した。

「うーん、すごい気難しい子だよ。ここら辺のワンちゃんネコちゃんとはもう友達なのに」

（それ、威嚇しても無駄だと本能的に察してるのでは……いや、これ以上やめとこ。俺も命が惜しい）

そう思いつつ、半ば狂乱している猫を腕の中に抱きかかえあやすように喉を擽る。その甲斐もあり、未だ毛を逆立てているものの唸らなくなる程度に落ち着いたところで話を切り出す。

「もう店じまいか？」

「本当はもう少し時間があるんだによ。でもお客さんは親子か、お友達同士。後はカップルさんもいるけど、この時間帯からは屋台のクレープよりお洒落なカフェにどうしても集中しちゃうんだによ」

「まあ、それもそうか。この公園、昼間は良いが暗くなつてくると見通しがいいとは言えないしな」

昼間に人が集まるからこそその弊害というか、なんと言うべきか。夜の公園というモノは基本、閑散として街灯があつても薄暗いものだ。加えて自然の緑が多ければ、その分多くの死角ができてしまうのは道理である。

偏見を承知で言うのなら、そんな所によつて来るような者は多少なり薄暗い事情を抱えているか、お盛んなカップルがイチャコラ（イチャコラ含む）しに来るくらいなもの。

「そうなんだによ。オーナーから許可は得てるから、早めに閉店してお家で『劇場版魔法少女ミルキーアストラル6 milk_{ミル}ky_{キー} Re_レ, code_{コード}（特別限定版）』を見ようと思つてたんだによ」

「……相変わらず、趣味に全力投球しまくつてんなあ」

ミルたんとは数年来の友人？で時折、トレーニングや組手に付き合ってもらっている間柄ではある。

しかし、過去に一度ミルさんの趣味が高じた騒動に巻き込まれている千歳としては、人の趣味にケチをつける気はなくとも褒めることもできず、曖昧な表情でそう言う他なかつた。

「あー、と。それで注文したいんだが……いいか？」

「もちろんいいによ。ご注文を承りますによ」

「デラックスチョコバナナ一つ。トッピングにメープル、バニラアイス、チョコアイス、生チョコキュープ。あ、カスタードクリームも増し増しで添えてくれ」

「かしこまりましたーによ。……相変わらず、凄いカロリーだによ」

ボソツとつぶやくミルたん。通常の倍ほどの大きさのデラックスサイズにこれだけの甘味料とトッピング。

兵藤千歳。顔や体格に似合わず重度の甘党であつた。